７．それぞれの接点

今回、紹介する６人のうち、熊阪台州を除く５人は、ほぼ同世代と考えてよい。出生年順では、高橋太華が１８６３（文久３）年と一番年上で、若松賤子１８６４（元治元）年、石井研堂１８６５（慶応元）年、原抱一庵１８６６（慶応２）年と続き、少し間を置いて山内秋生１８９０（明治２３）年となる。同郷であるということも影響して、互いに様々な接点を持っていた。

石井研堂と高橋太華

高橋太華は石井研堂と同じ郡山小学校の同窓である。ここで二人は恩師と仰ぐ御代田豊から近代的理数科教育を受けた。その後、明治10年から３年余、郡山小学校勤務で研堂との往来が続き親交を深めていた。

太華は明治２２年５月、少年雑誌の開祖といわれる『少年園』第１３号をもって主任を降りたのは、同年７月、石井研堂が携わった少年雑誌『小國民[*1]』の創刊に協力するためだったといわれており、共同編集人を勤めている。

入院中の研堂が太華に宛てた手紙が絶筆となったばかりでなく、研堂を看取ったのも太華であった[*2]。研堂の没後刊行された『明治事物起原』には太華の跋文が献じられている。

> 余の研堂兄と相識深交を重ねしことは、實に七十年の長きに亘れり。而も同郷の舊縁に基くにあらず、縁籍の関係あるにあらず、又此に同じく生存の基地を文学方面に゛たりとはいへ、方針帰趨は一ならず、隨て境遇交渉も相似て相異りしに拘はらず、曾て一回の癸違舛午もなく、親密の交歓全く同胞のごとくなりしは、眞に奇縁と謂ふべし。[*3]

石井研堂と原抱一庵

石井研堂は、原抱一庵について『書物展望』[*4] 第６巻第４号に「原抱一庵と私」という記事を載せている。その中で

---

*1 明治 28 年 11 月 12 日発行から『少國民』と改題される。

*2『石井研堂』山下恒夫：著 リブロポート 1986 p.279-280 L289-I14-2

*3『明治事物起原 増補改訂 下』春陽堂 1944 「跋」冒頭より LA031-I-2-2

*4 当館所蔵は復刻版（臨川書店 1984） Z051-S26

「私が、始めて抱一庵に會(ゆたか)ったのは、何時であったか記憶にないが、白皙痩体の美男子で、稚氣饒に、率直で、寧ろ愛すべき點のあった人たることだけは記憶して居る。・・・どうかも少し生かして、一廉の文士にし、郷里の花としたかった。」

と述べている。その文末には明治２５年１２月１１日付の抱一庵から研堂宛ての手紙が載せられている。ある作品発行に関しての助力を乞う依頼の手紙である。

また、当館で所蔵している石井研堂の葉書[*5]は、研堂が、書誌学者斎藤昌三に宛てて書いたもので、昭和 17 年 1 月 4 日付の消印がある。内容は、「同郷の作家・翻訳家である原抱一庵について書いた自分の文章を、探しても見当たらないので、写してすぐに返すから貸して欲しい」というものである。その「文章」というのが上記の「原抱一庵と私」ではないかと推察される。[*6]

原抱一庵と若松賤子

若松賤子は、フェリスを卒業した明治１５年の夏、休みをブース校長一家と函館で過ごすため太平洋岸を船で旅行していた。その途中、船が福島県の薄磯海岸沖で座礁。危うく難を逃れた賤子が、４日間福島県に滞在していた。その年、原抱一庵は福島で、その創作に大きな影響を及ぼした「福島事件」に遭遇している。直接の接点ではないが、奇妙な偶然とも言えよう。

石井研堂と熊阪台州

石井研堂が１９０１（明治３４）年に出版した『文藝漫録雅三俗四』[*7]の中に「熊坂台州の含餳記事[*8]」という文章を書いている。

中井履軒の昔々春秋（実は履軒の作に非ずといふ説ありとか聞けり）は、大に世に行はれて、人の善く知る所なれども、それより先に成れる、

---

*5『斎藤昌三宛葉書』　L289-I14-3

*6『福島県郷土資料情報』No.38　「貴重郷土資料探照　2　石井研堂葉書」参照　L029.2-F1

*7 当館所蔵は『新編雅三俗四』（青裳堂書店　1997）　LA049.1-I

*8「熊阪台州の含餳紀事」が正しいが、以下の文章も原典どおりに記述した。この文章は、のちに研堂の著作活動の集大成『明治事物起原』にも収められた。

熊坂台州の含餳記事の世に知られざるは気の毒のことなり。含餳記事紀二翁事紀蟹猿事紀桃奴事三巻に分ち、童話を漢訳せり。寛政四年の発行なれども、天明元年以前の作なり。唯、昔々春秋に比すれば、文章冗漫にして、簡古遒勁の点は乏しきに似たり。(以下略)

『少年園』と若松賤子・原抱一庵

若松賤子は、高橋太華が編集に携わった『少年園』の第１１７～１３２号[*9]に１３回にわたり「セイラ・クルーの話　一名ミンチン女塾の出来事」(のちに「小公女」として読み継がれる)としてバーネットの作品を翻訳している。この作品は、賤子が肺結核のため医者に転地療養をすすめられ移り住んだ北豊島郡王子村で書いたものである。

また、原抱一庵は、同じく『少年園』の第１４５～１５６号に９回にわたり「ＡＢＣ組合」(ユーゴーの「レ・ミゼレブル」)を翻訳している。

いずれの作品も、「『少年園』の最終段階を飾った」[*10]と言われている。

『明治大正の童話界』で足跡を記す山内秋生

石井研堂、高橋太華、若松賤子、原抱一庵の足跡をいち早く文学史上に遺したのが山内秋生であった。秋生が記した「明治大正の童話界」[*11]によって、彼等が近代児童文学に遺した足跡をたどることができる。それは、近代児童文学黎明の作品に触れ、少年期をすごすことができた秋生の記憶ともいえるだろう。

---

*9　1893（明治26）9.3～1894（明治27）4.18

*10「解説 主幹山縣悌三郎と『少年園』」滑川道夫『『少年園』解説・総目次・索引』不二出版　1988

JZ05-シ-14

*11『日本童話選集 2』童話作家協会：編 丸善 1927 所収